

## 第九章・調停

両旅団の歩兵隊はマンダ近くのゴースムで停止したままであったが、騎兵隊はあらゆる方向に毎日偵察を行った。視界にある対象は時に地形学的であり、時に軍事的であり、あるいは外交的、インド的应用でその言葉を使うなら「政治的」であった。

一〇日、ディーン少佐はジャンドル溪谷の様々な首長を訪問した。私は彼に同行の許可を求めた。その場を離れることのできるすべての人は暑くてほこりっぽいキャンプからの転地に乗り気であり、結構な一団が結成された。その中にはビートソン少佐、ホプデイ少佐、フィンキヤツスル卿など既に本書に登場した名前があった。第一ベンガル槍騎兵隊の戦隊が護衛を務めた。

ジャンドル溪谷は約八マイルの長さがあり、幅はおそらくその半分である。パンジコラからナワガイまで続く主溪谷に始まり、他のすべての側面は高く険しい山々に囲まれている。川の底は、私たちの訪問時には小さな小川が流れているだけだったが、ほぼ半マイルの幅がある。多くの巧妙に工夫された堤防と水路によって隣接する水田に水が導かれている。平原自体は乾燥して砂だらけであるが、冬には中程度の収穫が得られる。多くのスズカケノキの木立が地下水の存在を証明している。

この谷は自然および政治的特徴において、アフガニスタンの谷の典型と見なして良いであろう。七つの別個の城が七人の別々のカーンの拠点を形成している。これらの有力者のうちの数人がマラカンド攻撃に関係しており、私たちの要塞への訪問は完全に友好的な性質のものではなかった。死ぬまで戦うという最も神聖な誓いを結ぼうとして、彼らは丸四日間を費やした。しかし大きな部族連合は崩壊し、間際になって彼らは和平を決定した。しかしパシヤン人は中途半端なことほしない。険悪な表情や不機嫌な沈黙で彼らの歓迎の温かさを損なうことはしない。私たちが最初の要塞化された村に近づくと、支配者とその軍隊は私たちに会いに馬で出てきて、多くの言葉で忠誠を主張し、私たちの無事な到着に喜びを表明した。彼は見栄えが良く、スタンピング・ローンの種牡馬に姿よく騎乗していた。その服装は印象的であった。金のレースに厚く覆われたゴージャスな深紅のチョッキから、手首をボタンで留めた白いリネンの流れるような袖が伸びていた。また長くてゆるい、だぶだぶのリネンのズボンも足首の上で留められており、靴の先端は奇妙に尖っていた。豊かに刺繍された小さなスカルクヤップ、装飾用の剣がこの印象的な装いを完成していた。

彼は優雅に機敏に馬を飛び降りてディーン少佐に剣を捧げた。少佐は騎馬して同行するよう告げた。兵は毛むくじらのポニーに乗った四―五人の悪辣な見かけの男たちで、か

なりバラバラの様式のライフルで武装しており、距離を置いて後に続いた。砦は百ヤード四方の囲いであった。その壁はおそらく高さ二〇フィートで、泥で塗りつぶされた粗石で構成され、木材の層が散在していた。上部に沿って銃眼が並んでいた。それぞれの角には進入路に縦射を加えるための高い側面塔があった。この好戦的な住居の門には約二〇―三〇人の部族民が集まっていた。率いていたのは年配で長い白いローブを着たカーンのいこである。全員が私たちに厳粛な敬礼をした。護衛が間隔を詰めた。一隊が砦の射程内から速足で出て行った。前進偵察隊は壁を周って遠い側に位置をとった。これらの詳細な事項が遵守され、会話が始まった。それはパシウトウ語で行われたので、二人の政務担当官以外の私たちの一団の全員は当然ながら理解できなかった。どうやらデイーン少佐は二人の首長の行動を非難したようである。彼は彼らがパンジコラにかかる橋を奪取して、マラカンドを攻撃するために集まった狂信的な群衆に通路を提供したことを非難した。彼らは十分容易にこれを認めた。「では、なぜいけないのか？」彼らは言った。「良いフェアな戦いがあった。」今、彼らは和解しようとしている。彼らは悪意を持っていない。なぜサーカーが持つのか？

しかし、このスポーツマンのような状況の見方を受け入れることはできなかった。引き渡すよう命じたライフルはどこにあるのか、という問いがなされた。これに彼らはぼかんとした。ライフルなどなかった。ここにはいかなるライフルもなかったことはない。兵士たちに砦を搜索させ、彼ら自身に見させよう。命令が出された／三、四人のスワールがカービン銃を構え、下馬して、疑わし気に少し開けられた大きな重たい門に入った。

門は小さな中庭へ通じており、中庭は内部の防衛側によってあらゆる側面から見下ろさされている。目の前には、規模が良く分からない大きな低い部屋があった。一種の番所である。ただ男たちがざわめいているだけだった。外壁は五フィート近くの厚さがあり、山砲の砲火にも耐えられたであろう。強力な建造物であった。

武器の捕獲作戦に慣れている槍騎兵隊は予想される一般的な場所を急いで搜索したが、見つからなかった。しかし彼らはあることに気づき、すぐに報告した。砦には女性や子供がいなかった。これには不吉な側面があった。私たちの訪問は予想外であり、彼らは驚いたが既に全ての緊急事態に備えていた。彼らはライフルを隠し、戦闘の準備をしていたのである。

二人の首長は優れた善良さで微笑んだ。もちろん、ライフルはなかった。しかし、事態は彼らにとつて予想外の方向に向かった。彼らはライフルを持っていなかった―デイーン少佐は言った―それでは彼ら自身を来なければならぬ。彼は槍騎兵隊の将校の方を向いた／一つの分隊が前方に進み、二人を囲んだ。抵抗は無駄だった。逃走は不可能であった。

彼らは人質であった。しかし彼らはオリエントの落ち着きをもって行動し、避けられないものを冷静に受け入れた。彼らはポニーを用意させ、騎乗して護送者と共に私たちの後ろについた。

私たちは谷を登って行った。各砦に近づくと、カーンとその郎党が出てきて私たちを出迎えた。これに際して明らかな興奮はなく、関係は友好的であった。谷の頂上はこれらの中で最も強力な小プリンスの本拠地、バルワである。この砦はウムラ・カーンのものであり、その卓越した建築様式によってその非凡な男の知力の発達を証明していた。チトラル遠征の後、それは政府によって現在の所有者に与えられた。しかし彼は谷の他の族長たちと自らのほとんどの近親者らに酷く憎まれ、イギリスへの忠誠以外の選択肢はなかった。彼は私たちを礼儀正しく迎えてくれ、砦に入って見るように私たちを招いた。すべての予防措置を取り、哨兵を配置した後でこれは行われた。それは私が見た中でアフガン建築の最高の見本であった。まさにこの砦でファウラー中尉とエドワーズ中尉が一八九五年にウムラ・カーンの捕虜として監禁されていたのである。新しい主がバルコニーの開いた部屋を見せてくれ、そこから渓谷全体の素晴らしい景色を見ることができた。監禁用のより悪い場所は沢山あった。砦は注意深く防衛され、さまざまな進入路を完全に見渡すことができた。銃眼と塔の賢明な配置がすべての死角をカバーしていた。壁の内側のブラシウツドの回廊から防衛側は身体を晒すことなく銃撃できるようにになっていた。中央には塔があった。運命の女神が微笑まない場合にはそこが守備側の最後の拠点となるのである。

こうして、なんと奇妙な共同体のシステムが明らかにされたことであろう！背後に山を背負い、谷の残りの部分、すべての同族に対して、死の恐怖と戦争の可能性を常に心に留めつつ、部分的に武力で、部分的に英国のエージェントの支援によって、また部分的に敵との絶え間ない確執によって生き抜いている男がここにいるのである。

これらの谷間では、「全員対全員」である。逮捕された二人のカーンは丘に逃げることもできたであろう。彼らは罰せられることを知っていた。それでも彼らは自らの要塞を離れることを敢えてしなかった。おそらく隣人、親族、兄弟が無防備な砦に足を踏み入れ、それを自分のものにしてしまうであろう。これらの砦のすべての石は裏切りで血塗られており／土地は一エーカー毎に殺人現場である。バルワでは、ウムラ・カーンが兄弟を殺した。憤怒や堂々とした戦いによってではなく、背後から冷淡に計画的に殺したのである。こうして彼は権力を獲得したのである。「フォワード・ポリシー」がなければおそらく彼は今日を楽しく暮らしていたことであろう、とモラリストは身震いしながら述べるかもしれない。このウムラ・カーンは多くの才能を持っており、知性において同胞よりはるかに抜きん出ている。辺境ではそれは偉大な殺人者であったということの意味するが、彼は偉大な男であった。彼は交渉中であつた速射銃と「ヨーロツパモデル」で訓練していた軍隊によって

多くのことを達成していたかもしれない。しかしインド政府の意思による表や裏からの介入によってこのアフガニスタンのナポレオンのキャリアは断たれた。彼を利用することができたかもしれない。イギリスの支配力に触れてそれを知った強い男は共に働くのに最適な道具であり、ウムラ・カーンの鼻柱を折って感服させてから元の地位に復帰させたなら、彼は法と秩序を維持するために役立つかもしれない、と辺境をよく知る人々は言う。戦う際にアフガン人はどちらの側で戦うかをあまり気にしない。今日、私たちを手伝ってくれる悪い男たちと悪い同盟者がいる。実務に疎い人は私たち、世界で重要な位置を占める人々、がいったいどうしてこれらの国境の首長たちのせせこましい陰謀に関わり、そのような道具を使って手を汚すべきなのか疑問に思うかも知れない。大英帝国が一人の残忍なカーンを隣人に対抗させること、または一つの野蛮な部族を別のそれに対抗させてバランスを取るの適切なことであろうか？それは百万長者が砂糖鉢の角砂糖を数えるのと同じくらい、私たちの帝国の威厳をはるかに下回っている。この地域を占領することが私たちの所有物の安全のために必要であるならば、それに対して強い影響力を持っているべきである、という意見には私たちの自尊心もより同意できるであろう。それについてはもっと威厳があったほうが良いのかも知れない。しかし威厳を保つことほど費用がかかることはない。そして、私たちが現在の誇り高い地位に到達したのは、この点において常に健全な商業の原則に導かれてきたためであろう。

要塞の周りを見て、それを構築した手腕と知識を賞賛した後、私たちはカーンに砦の壁からほど近い小さな泉のほとりの美しいスズカケノキの木陰に案内された。ここには非常に快適であるが通常は虫がいっぱいいる沢山の網縁台や現地のベッドがあり、その上には私たちは座った。

マイザル、その他の多くの辺境での歓待事件を忘れるわけにはいかないので、すべての進入路に歩哨が置かれ、十分な護衛が戦闘態勢を維持していた。そして私たちは朝食を最も素晴らしい朝食を摂った。

辺境軍の部隊の快適さと利便性のための準備には比肩するものがない。彼らはアルダーショット軍事演習でのイギリス連隊より快適に、より不快感の少ない現役生活を送る。行軍が長くても短くても、平和的でも対立的でも、戦闘が成功しても失敗しても、その兵站部は決して失敗することはない。実際、敵には常に銃と弾丸があり、友軍にはサンドイッチと「ペグ（\*テントを張る小杭、洗濯ばさみ）」があるというだけである。

この機会に、私たちの糧食はカーンのもてなしで補われた。食べ物を背負った男たちの長い列が現れた。ある者は梨やリンゴといった果物／他の者は山積みのチャパティ（インドの種なしパン）やピラフの料理を持ってきた。

私たちの騎兵隊も忘れられてはいなかった。その中のマホメタンは、提供された食物を遠慮なく受け入れた。しかし、シーク教徒は済まなそうに沈黙を保ち、辞退した。彼らはイスラム教徒の手で調理されたものを食べることができなかった。そこで彼らは食欲をそそる料理を物欲しそうに見つめながら座って、少量の果物に甘んじた。

その高い徳を痛々しいほど意識している彼らの姿は非常に厳かで立派であった。しかし私は、もし観客が私たちでなかったなら、スズカケノキが宗教的偏見に対する理性の勝利を目撃していたかもしれないと考えずにはいられなかった。

日中の暑い中、私たちはこの心地よい木立で休み、睡眠と会話によって何時間も過ごし、これがより恵まれた土地でのピクニックパーティーである、という幻想を乱すものはあちこち歩き回る歩哨だけであった。そして影が長くなったので、私たちはキャンプへの帰還を開始した。

到着すると部族民が政府の協約を受け入れる決心をしたことを知り、政務担当官は喜び、兵士たちは失望した。ウトマン・ケル族のライフルはすでに一〇〇丁が引き渡されており、今ではデイン少佐のテントの外にあり、それらの調査に忙しく従事している将校の群れに囲まれていた。

旅行や戦争の物語において、物語の中に結論や議論を散りばめると、最終章にそれらすべてを集めるのでは、どちらが望ましいかについては意見が分かれており、どちらかの意見に従って実践されてきた。私はためらうことなく前者の方法をとることにする。物語はそれが起こるに従って語られるものであり、途中で考察や内省が生じるに従って読者の注意はそこへ向くものだからである。したがって、ゴースムのキャンプのメインストーリーに一〇〇丁のライフル、おそらくそれが全てではない一〇〇丁のライフルが積まれている現在、辺境部族への武器の供給問題の余談を語ることは適切である。

その中に国境の人々が生きる永続的内戦状態は、当然致命的武器に対する強い要求を生む。良いマティーニ・ヘンリー・ライフルは、この地方では常に四〇〇ルピーまたは約二五英国ポンドの値段で買い取られる。このようなライフルの実際の価値は五〇ルピーを超えないため、意欲的な商人には非常に大きな利ざやが生じることは明らかである。辺境全体で、そしてずっと下のインドでも、ライフルは熟練した賢い泥棒に盗まれる。ラグマン溪谷（\*ジャララバード北西の谷）に住んでいるウト・ケルという一部族は武器の運輸を特別な生業としていた。その泥棒は最も大胆で、その代理人は最も賢かった。彼らのやり口のいくつかは非常に巧妙であった。一つの話は繰り返す価値がある。棺桶が

鉄道輸送に提出された。故人の親族が同行していた。彼らは死んだ男は辺境に埋葬されることを望んでいたと言った。臭いは死体の腐敗が進行していることを示していた。鉄道職員は非常に不快な物体の通過のためにすべての施設を提供した。経過を確認した者はいなかった。それは近寄りがたいものであった。棺桶と会葬者が安全に辺境へ渡って行った後に初めて、一ダースのライフルが棺桶の中に隠されており、四半身の「よく熟成した」牛肉が死体の代わりに入っていたことが警察に知らされた！

残念ながら、辺境部族が武器を入手する手段は盗難だけではない。ウトマン・ケル族が引き渡した一〇〇丁のライフルのうち三分の一近くが政府のマティーニ銃であったと宣告された。政府の刻印があった。現在はそういうライフルは存在しないと思われる。そうした宣告がなされるとたちまち、破棄されたそれらについて兵器庫当局が責任を問われる。これはヨーロッパ人の監督の下ではすべての事例において行われることである。そのようなライフルが破棄されずに国境部族民に所有されているという事実は、兵器庫に關係する誰かによって不正で違法な輸送が行われていることの非常に重大な実例を指し示している。捜索調査が開始されたとは到底言えない。

これらのライフルに関連するもう一つのポイントは、三つに切断して正式に破棄された場合でも、その断片には市場価値があるということである。部族民によって再結合されたものを私はいくつか見た。もちろん、これらは非常に危険な武器であった。百丁の中には他にも奇妙な逸話を持つものがあった。二―三丁はロシアの軍用ライフルであり、おそらく中央アジアの遠い基地から盗まれた。一丁はマイワンドで奪われたスナイダー銃であり、それが属していた不運な連隊の番号を帯びていた。いくらかはおそらくヨーロッパからアラビアとペルシャの陸地経由で／＼その他はカプールの武器工場から来たのであろう。それは需要を満たすための供給のためゆめめ努力の一風変わった事例であった。

武器問題の重要性はいくら強調しても強調しすぎることはない。大辺境戦争を独特なものとした長距離ライフル射撃は新しい特色である。これまで私たちの部隊は大胆な剣の攻撃に直面しなければならなかったが、発砲に直面することは比較的少なかった。前者に対し、近代兵器は効果的である。しかし、どんなに訓練しても、いかに有能であろうとも、弾丸が兵士に当たるのを止めることはできない。これは問題のほんの一部である。戦いにおいては部族民に十分なものは兵士にも十分であるべきである。結局のところ栄光の不可分の付随物にすぎない死傷者よりも重大な検討事項が持ち上がってくる。山岳地帯での輸送はラバとラクダに完全に依存している。一つの旅団に補給するだけでも、非常に多くの数が必要である。夜にはこれらの動物をしっかりと守られたキャンプにぎっしり詰め込む必要がある。近くの丘から見渡せず、ヌラーから攻撃されないキャンプ場を谷に見つけることはできない。歩哨を出すことは「剣で突撃されたり」、激しい攻撃の際には、敵の本隊の

銃火で仕留められたりするため危険である。「これは、剣の突撃がまだ懸念されているスワットとバジャウルに適用される。」その結果、輸送動物は夜間に長距離銃火にさらされなければならぬ。読者は記事が進むにつれて、二度こうして大量の輸送用ラバが殺されるのを見ることになる。ある一定の数が殺されると、旅団は石炭のない機関車と同じくらい無力である。動けない。援助がない限り飢えなければならない。毎年、部族民は優れた狙撃手になり、より良いライフルでより完全に武装する。彼らが私たちの動物を絶えず狙撃するという方針に気づくならば、すべての行動は停止させられるかも知れない。そして、こう考えるゆえに私は辺境で行われることは何でも、できるだけ早く行われるべきであるという結論に達するのである。では話に戻ろう。

翌九月一日、軍隊はゴースムで停止していたが、別の戦隊が諜報将校であり殊勲章のH・E・スタントン大尉がウトマン・ケル地方に入る山道の地形的偵察をする際の護衛を命じられた。新しい地図を作成し、既存の地図の詳細を追加および修正する機会は軍隊がその地方を通過するときのみ発生するため、見過ごしてはならない。道はナワガイへ通じる主溪谷を上っていた。私たちは早めに出発したが、道は長く、峠の入り口に着く前には日が高くなっていた。風景は私に今まで見た中で最も奇妙なものの一つであった。川の対岸にはウトマン・ケル族の住居があり、七マイル×三マイルのエリアに、堀、塔、小塔を備えた四六の独立した城を数えた。風変わりな印象が生まれていた。グリム童話が連想された。それはまるで私たちが通常の地上を去り、空想の不思議な国、巨人や鬼のリゾートに迷い込んだかのように思えた。

峠にたどり着くために、私たちは大きな村を横断することを余儀なくされた。道は狭く曲がりくねっており、その厄介さは騎兵にとっては想像し得る限り最大のものであった。攻撃に対する防衛のためにあらゆる可能な予防措置が取られた。ようやく戦隊は安全に通り返して、その先で隊列を組んだ。峠への急な登りが見えるようになった。偵察するべきルートが二つあったためパーティーは分割された。急いで朝食をとった後、私たちは上り始めた。かなりの距離を馬上で行くことができた。コース上の全ての難しいターンにはスワールが配置された。急いで戻ってくる必要がある際の退却を安全にするためである。村の首長はガイドとして私たちの安全を大いに心配してくれる陽気で愉快な道連れを同行させてくれた。しかし、これらの人々を当てることはできなかった。谷の反対側には前進する隊に歩調を合わせて移動する多くの人影が見られた。やがて馬と付き添いの大部分を放棄しなければならなくなった。私はスタントン大尉と、ロイターの特派員でもある戦隊の指揮官コール大尉と二個騎兵隊とともに峠の上まで同行した。その日は非常に暑く、困難な登山は癒しようのない喉の渇きを引き起こした。やっと私たちは頂上に到達し、コタルに立った。

アレクサンダーがインドへの行軍で山を越えて以来、おそらく白人が見たことはなかったであろう谷を私たちははるか下に見ていた。多くの村々がその奥深くに点在しており、また他の村々は丘に寄り添っていた。離れ離れの砦が目につき、大きな木々が水の不足がないことを示していた。それは登山の努力が報われる景色であった。たとえそれによって引き起こされた渴きが癒されなかったとしても。

スタントン大尉がスケッチ―あの有用な景色のスケッチのうちの一枚―を作成している間、そのとき迅速騎兵隊偵察の他のすべてのものにとつて代わって、私たちは親切で清潔なヨーロッパ人ウエーターが近くにいたなら注文して持参させる飲み物の名前を挙げる空想を楽しんだ。私が何を選んだかは忘れたが、それは非常に長くて非常に冷たいものであった。ああ！想像力は現実にとれほど遅れていることか。私たちが眼前に思い浮かべた鮮やかな印象―深いグラス、そしてチリンと鳴る水―は、不快感を消散させるほどではなかった。

その間、私たちのガイドは地面にしゃがみこみ、指さされたすべての村の名前を発音した。間違いないことを確認するために一連の質問が繰り返された。彼は大きな自信と誇りに満ちた様子で、今度はそれぞれをまったく違う名前と呼んだ。しかし発音できなかった名前はどれも同じようなものである。谷の村々は田舎者の気まぐれで命名されて公式の歴史に残るのである。しかし、今では論争不要として受け入れられている多くの記録も、おそらくそのような貧弱な権威に由来しているのであろう。

スケッチが終了して私たちは降下を開始し、問題なく馬のところに辿り着いた。戦隊は村の近くに集結し、私たちはもう一つのスケッチパーティーは私たちが引き当てたよりも多くの冒険に遭遇していたことを聞いた。

それを指揮していたのはヘスセス中尉であった。彼は若い将校で、一八九五年のマラカンド峠の襲撃で重傷を負ったが、再び現役に志願して第一ベンガル騎兵隊に所属していたのである。峠のふもとで、彼は部隊を下馬させ、数人の兵士を連れて登り始めた。峠は部族民に占領されていた。彼らはさらに前進するならパーティーを攻撃すると脅した。自分は反対側にある土地を見たいだけで、誰にも危害を加えるつもりはない、と中尉は答えた。同時に彼は道を進み、部族民は事を荒立てることを望まず、ゆっくりと後退し何度も狙いを定めたが発砲はしなかった。彼は峠の頂点に達し、副謀報将校のウォルターズ中佐はその先の土地の最も貴重なスケッチを作成することができた。それは大胆な行為であり、他のいかなる理由よりもその大胆さによって成功したのである／もし部族民が発砲していたならばパーティーの中に生きて降りることができた者はほとんどいなかったであろうからである。村を二度も横断することは望ましくなかったため戦隊はそれを迂回して帰



り、太陽が沈むとともにゴーサムのキャンプに到着した。

英印旅団の軍事キャンプは、通常原則に基づいて配置されている。歩兵隊と砲が四角形に広がっている。動物と騎兵は中に置かれる。中央には司令部のキャンプがあり、師団を指揮する將軍のテントに面して准將のテントがある。周囲には胸壁が構築されており、敵の近接度と活動に応じて高さが変化する。この胸壁は無作為な銃撃からの防御になるだけではなく、突然の攻撃の場合には兵士がそこに布陣するのである。その背後に歩兵隊が横になって眠り、各中隊の一部門は身支度をし、軍装して小哨となる。彼らのライフルはしばしば銃剣をとりつけた状態で低い壁に沿って置かれる。騎兵隊が防衛の一部を担わなければならぬ場合、彼らの槍も同様に配置されることがある。一列の見張りと共に二五ヤードごとに歩哨がキャンプを囲んでいる。

月明かりの景色を一人で見るとは、旅がよく報われる経験である。たき火は弱まって赤く光る点になった。銃剣が規則正しく並んだ青白い点の列となって煌めいている。退屈な沈黙は、絶えず落ち着かない動物の動きと時折の馬の嘶きによって破られる。すべての谷は暗闇に沈んでおり、山々は黒々と高く聳えている。それらの横のはるか向こうに部族民の煌めく篝火が見られる。頭上は月の淡い輝きに包まれた星空である。それは芸術家に劣らず哲学者にインスピレーションを与える光景である。キャンプは抑制された物音に満ちている。ここには静かだまじめな思考のための反省の場所はない。その日はエキサイティングなものだったかもしれない。翌日は戦闘があるかもしれない。何人かは殺されるかもしれないが、戦時の命は今を生きるだけである。休息をとるには十分疲れている。キャンプはそれを構成するさまざまなアイテムがすべて個性を持っていると言えるのであれば、肩をすくめて、過去を悔やまず、不安を持たずに未来を見つめるのである。